

ユストゥス・クリストフ・ディトマールの 官房学

川 又 祐

目次

- 1 はじめに
- 2 フランクフルト・アン・デア・オーダー大学におけるディトマールの経歴
- 3 ディトマールの著作
 - (1) 『経済学評論』
 - (2) 『構想』
 - (3) 『入門』
 - (4) 『国家学草案』
- 4 おわりに

1 はじめに

2026年、2027年は官房学にとって節目の年となる。2026年は、官房学の代表者の1人ゼッケンドルフ（Veit Ludwig von Seckendorff. 1626-1692）の生誕400年にあたる。そして2027年は官房学の講座がハレ（Halle）大学とフランクフルト・アン・デア・オーダー（Frankfurt an der Oder. ラテン語では、ヴィアドリナ、Viadrina。以下フランクフルトと略記する。）大学に創設されて300年にあたる。ゼッケンドルフ（Veit Ludwig von Seckendorff. 162-1692）は最晩年の1692年にハレ大学に招かれ、大学発展への手腕を期待されるもハレで亡くなってしまう。

その後、官房学の講座はハレ大学ではジモン・ペーター・ガッサー (Simon Peter Gasser. 1676-1745) に、フランクフルト大学ではユストゥス・クリストフ・デイトマール (Justus Christoph Dithmar. 1678-1737) に委ねられた。本稿では、フランクフルト大学で官房学講座を担当したデイトマールを中心に上げる。

デイトマールは他のカメラリストの陰に隠れて、注目を浴びることは少なかった。前期カメラリストであるベッヒャー (Johann Joachim Becher. 1635-1682), ゼッケンドルフ, 後期カメラリストであるユステイ (Johann Heinrich Gottlob von Justi. 1717-1771), ゾネンフェルス (Joseph von Sonnenfels. 1732/1733-1817) には数多くの研究書・モノグラフがあり、個別の研究対象になっている。しかしながらデイトマールには残念ながらそれらが無い。人名辞典や研究書の中で取り上げられるにしても部分的で、紙幅も数ページに過ぎないのである (Vgl. Inama, Grimm)。デイトマールが取り上げられるにしても、シュティエダの記述「彼は本書〔『入門』〕の内容を8つの部に分け、その第1部は3つの学問の理論的評価に、第2部、第3部はラント経済と都市経済に、第4部、第5部、第6部はポリツァイと官房学に充てられている」(Stieda, S.22) のように、誤解・誤認されたまま言及されているものもある⁽¹⁾。

デイトマールの経歴はどのようなものであったのか、彼は後述するように、官房学教授に任命された後、官房学に関して4つの著作を出版している。これら4点の著作がどのような関係にあったのか、そして官房学に対してデイトマールが果たした役割はどのようなものであったのか、を原典に照らしながら明らかにすることが本稿の課題である。

2 フランクフルト・アン・デア・オーダー大学におけるデイトマールの経歴

ハレやフランクフルトにおいて官房学が大学教科として創設・採用されるまでの経緯については、不明な点が多い。ガッサーは、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世によってハレ大学の官房学教授に任命された経緯について、1729

年ハレで公刊された教科書『経済学，政治学，官房学入門』（*Einleitung zu den Oeconomischen Politischen und Cameral-Wissenschaften*）において報告している⁽²⁾。またガッサーは教科書を公刊する前年の1728年に『公式教育計画』（*Programma publicum*）を発表している。その中でガッサーは，官房学が取り扱う対象を36の章に亘って構想している⁽³⁾。

一方，同国王によってフランクフルト大学の官房学教授に任命されたデイトマールの経歴についても不明な点が多い。イナマによれば，デイトマールはローテンブルク・アン・デア・フルダ（Rotenburg an der Fulda）に1677年3月13日に生まれたというが（Inama, “Dithmar”, S. 259），デイトマールの誕生日は確定されていない。ゲルラントやグリムは誕生日を示さずにデイトマールの洗礼日を1678年6月16日としている（Gerland, S. 417. Anm. 1, Grimm, S. 746）。以下は，ゲルラントの記述に従い，デイトマールの経歴を報告する。デイトマールはマールブルクで歴史学と法学を学ぶ。彼は，若き貴族ダンケルマン（Dankelmann/ Danckelmann）に随行してオランダのライデン大学に向かう。その後祖国に戻ったデイトマールは，ダンケルマン家の勧誘，周旋でフランクフルトに定住する。ゲルラントによると，デイトマールは国王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世に対する1709年6月1日（あるいは7日）付けの嘆願書（Gesuch）において，フランクフルト大学における哲学，歴史学，古典学特別教授職（professor extraordinarius philosophiae, historiae und antiquitatum）への任命を願い出た。国王は応諾し，1709年6月28日，彼を同特別教授に任命した（Gerland, S. 418）。さらにデイトマールは1710年7月16日，国王に対して正教授への昇格を願い出た。1710年8月13日，内閣令（Kabinetsordre）が大学に発せられ，哲学正教授（zum Professore ordinario Philosophiae）への任命が決定する。さらに1710年11月21日，国王は命令（Verfügung）を発し，デイトマールの正教授昇任を確認している（Gerland, S. 419）。その後，デイトマールは学長職を1714年，1717年，1722年，1726年の冬学期，1730年の夏学期，1734年の冬学期に務めた。そして歴史学・政治学公式正教授となっていたデイトマールは，1713年にはすでに哲学部学部長職を，さらに同職を1725年，1732年に務めてい

る (Gerland, S. 419)。一方, デイトマールは1717年には図書館長に就任していたようである (Gerland, S. 421)。学外の活動としては, 1721年2月12日, ベルリン科学アカデミーの外国会員 (Auswärtiges Mitglied) に選出され⁽⁴⁾, 1726年にはヨハネ騎士団評議員 (Rat des Johanniterordens) の職に従事した (Gerland, S. 426)⁽⁵⁾。

そしてデイトマールに大きな転機が訪れる。国王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世は1727年8月22日, 枢密参議官ハクストハウゼン (Geh.-Kab.-Rat von Hachsthausen) にデイトマールへの任命状 (Bestallungsurkunde) を発行させた。その内容は

「朕フリードリヒ・ウィルヘルム, プロイセン王は, ここに次のように宣言し, 通知する。

朕は, これまで我がフランクフルト・アン・デア・オーダー大学において法学および歴史学の正教授であったユストゥス・クリストフ・デイトマールを, その知られた博識, 能力, 手腕, そして公共のために尽くしてきた忠実な奉仕を考慮し, また彼が官房・経済・ポリツァイ事項において獲得した特別な学識のゆえに, 朕の上述フランクフルト・アン・デア・オーダー大学における経済学教授に最も寛大に任命する。…」 (Gerland, S. 427)

である。さらに国王は1727年8月26日, 文書を発する (Gerland, S. 427-428)。これは後に言及する「王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会」 (Dithmar, 1731, 折丁 [π]3) に記載されているドイツ語部分と合致する文書である⁽⁶⁾。これにより, デイトマールは経済学, ポリツァイ学, 官房学教授として正式に任用されるのである。

フランクフルト大学におけるデイトマールの経歴について, 彼が出版した文献の表題紙, あるいは出版に関わった学位論文 (*Dissertatio*) などの表題紙には彼の地位, 役職が掲載されている。それを基に彼の経歴はある程度検証することが可能である (表1参照)。

表1 デイトマールの地位・役職

1709年	歴史学特別教授 Außerordentlicher Professor der Geschichte (Vgl., Gerland).
1710年	歴史学特別教授 Hist. Prof. Extraord (Dithmar, <i>Vita</i> . 1710. 1710年5月前日時点). 歴史学正教授 Ordentlicher Professor der Geschichte (Vgl., Gerland).
1711年	正教授 Prof. Ordin (Dithmar, <i>Dissertatio</i> 1711).
1713年	歴史学・政治学正教授 Hist. & Polit. in Acad. Viadrina Prof. Ord (Dithmar, <i>Disputatio</i> 1713).
1721年	歴史学正教授 大学図書館長 ベルリン科学協会会員 ⁽⁷⁾ Historiar. in Academia Viadrina Prof. Ordin. ejusdem Academiae Bibliothecarius, & Societ. Scient. Berol. Sodal. (Dithmar, <i>Annales</i> 1721).
1722年	フランクフルト大学長 歴史学・政治学公式正教授 哲学学部長 Rector Universitatis Regiae Francofurtanae, Historiarum ac Politices Professor Publicus Ordinarius & h. t. Facult. Philosoph. Decanus (Dithmar, Einblattdruck) *
1724年	歴史学・政治学公式正教授 Hist. et Polit. P. P. O. (Dithmar, <i>Dissertatio</i> 1724).
1727年	官房学教授任命 官房学教授就任公開講演（10月10日）告知 自然法, 万民法, 歴史学, 経済学, 政治学, 官房学公式正教授 ベルリン科学協会会員 Juris Nat. & Gent. Hist. et Oeconomico- Politico- Cameralium Prof. Publ. Ord. Soc. Scient. Berl. Sod. (Dithmar, Oratione publica, dabam III. Octobr. MDCCXXVII.).
1728年	自然法, 万民法, 歴史学, 政治学, 経済学公式教授 ベルリン科学協会会員 J. Nat. & Gent. Hist. Polit. & Oecon. P. P. der Berlinischen Societät der Wissenschaften Mitglied. (Dithmar, <i>Geschichte</i> 1728).
1731年	自然法, 万民法, 歴史学, 経済学, 政治学, 官房学公式正教授 ベルリン科学協会会員 Jur. N. & G. Hist. & Oeconomico- Polit. Cameralium Prof. Publ. Ord. Societ. Scient. Berol. Sodal. (Dithmar, <i>Einleitung</i> 1731).
1735年	自然法, 万民法, 歴史学公式正教授 Jur. Nat. et Gent et Hist. Prof. Publ. Ord. (Dithmar, <i>Dissertatio</i> [1735])
1737年	自然法, 万民法, 歴史学公式正教授 ベルリン科学協会会員 Juris Nat. et Gent. et Histor. in Acad. Viadr. Prof. Societatis Scient. Berol. Sodal. (Dithmar, <i>Dissertationum</i> 1737).

* 「h.t.」が何を表すのか、不明である。「当時の」を表す「hoc tempore」、あるいは「hac tempestate」の可能性はある。

ゲルラントの記述を表1の内容は概ね裏付けている（ただし哲学、歴史学、古典学特別教授、哲学正教授に関しては確認できていない）。ゲルラントの記述が正しいのであれば、これまで知られていなかったデイトマールの経歴がここに明らかとなるのである。デイトマールは、フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の庇護を受けて、フランクフルト大学で教授職を獲得したこと、その後も国王の支援もあり、学長、学部長、図書館長の重職を歴任したことが分かるのである。そして遂に官房学教授の地位を手に入れるのである。

ここでいくつか疑問が生ずる。先ず、正教授 (Professor ordinarius)、公式教授 (Professor publicus)、そして公式正教授 (Professor publicus ordinarius) には役職において何か違いがあるのか。次にデイトマールは1713年には政治学教授を名乗っているが、官房学教授就任後にあっても、彼は「経済学、ポリツァイ学、官房学教授」ではなく、「経済学、政治学、官房学教授」の名称を用いている。この「政治学」と「ポリツァイ学」は何を意味するのか。両者が同義語であるなら、1727年より前にデイトマールはポリツァイ学を教えていたことになる。もし両者が異義語であるなら、その場合彼は、政治学とポリツァイ学の2つを個別に担当していたということになるのか。最後に1735年には、官房学の名称が消え、「自然法、万民法、歴史学公式正教授」を名乗っている。なぜ官房学の名称が消えたのか。単に印刷の都合で省略されたのか。残念ながらこれらの疑問にここで答えることはできない。また、デイトマールに関して、ゲルラントの記述にも表題紙にも官僚としての職名は記載されていない。官職を務めていたのか、いなかったのかも不明である。官職を務めていなかったとすれば、ガッサーが教授職の他、官僚としての職務である法律参議官、戦争・ドメーネン参議官を務めていたのとは非常に対照的である (Vgl., Inama, "Gasser", S. 401)。デイトマールは大学教授としての人生を1737年5月13日に閉じている⁽⁸⁾。

3 デイトマールの著作

デイトマールは、本来的に歴史学を専門とする人物であった。彼は数多くの

著作を残している。また指導教授として学生の学位論文の作成にも関わっている。そして官房学教授に任命された後、官房学に関連する次の4点の著作『経済学評論』、『構想』、『入門』そして『国家学草案』を残している。

- (1) 『経済学，ポリツァイ学，官房学に属する様々な書籍，精選資料，有益な発見，構想，考察，その他の事項類の経済学評論（*Die Oeconomische Fama*）』（以下『経済学評論』と略す），1729-1733年。

デイトマールは1731年の教科書『入門』の公刊に先立って、『経済学評論』と『構想』を公刊している。『経済学評論』は、ドイツにおける最初の経済雑誌とされている⁽⁹⁾。『経済学評論』第1号（1729年）から第10号（1733年）までその公刊は全10号を数えた。第1号の「事前報告」（Vorbericht）においてデイトマールは、

「アリストテレスと彼の後継者たちは、経済学と倫理学とを混ぜ合わせ、彼らの経済学的な題名の著書で、夫婦間の、親子間の、主人と使用人間の家庭における義務についてだけを論じた。…〔経済学は〕異なるラント（Land. 領邦）や都市の産業（Gewerbe）を通じてどのようにして生業（Nahrung）や富が得られ、有益に活用されるかを教えるものである。それゆえ経済学は2つの部分に分かれ、その1つはラントの経済に関わり、…もう1つは都市の経済が含まれている。…ポリツァイに関しても同様の状況がある。…そこでは結婚した夫婦、親子、主人と使用人という家庭における交わり、共和国の起源、およびそれらのさまざまな種類、ラントのお上の権限、戦争、同盟、時代ごとの臣民の義務についてだけが議論されており、ポリツァイ事項はほとんどない。…ポリツァイは、その国家の叡智の中に存しており、上級のお上が国家の内外の繁栄と幸福を善き体制の中で維持することを重視し、従って、彼らの臣民は、数が多いだけでなく、キリスト教的で尊敬され、正しい洗練された生活と態度を維持し、またその生業と豊かさを繁栄するラントや都市の産業によって促進し、それだけでなく十分に配慮された都市や村ともにラントを整備し、全てを良好な秩

序で保つことに努力するのである。…官房事項についても同じ状況である。従来の政治学書にはほとんど有益なものがない。だが官房学〔狭義の官房学＝財政学〕は、どのようにして君主の王領地（Domainen）を十分に利用し、王領地から、そしてレガリエン（Regalien）や臣民の義務的な支払いから君主の収入を徴収し、適切に使用するかを教えるものなのである。

ここから、これらの学問の正確な関連性だけでなく、その優秀さと必要性も容易に推測することができる。経済の本質は善きポリツァイなしには存在しない。しかも官房制度はその両方の大部分から供給を得る必要があり、そうした形で国家の福祉がそれら学問に依存しているだけでなく、他のすべての学問も、何かを獲得するのに役立ち、獲得したものを守ったり、穏当にかつ神の榮譽のために使用したりすることを教える目的を持っている。」

と述べ（Dithmar, Vorbericht, S. 3-7. 引用文中の〔 〕は筆者が補った。以下同じ。）、デイトマールは官房学（広義）を経済学、ポリツァイ学、官房学（狭義）に3分類して、3者の関係性、重要性を主張している。ここで注目すべきは、アリストテレスに対する批判である。アリストテレスはいわば家庭内の事項のみを扱っているとし、ラントや都市の経済を扱う新しい経済学を提唱するのである。ポリツァイ学は、その国家の叡智の中に存しており、上級のお上が国家の内外の繁栄と幸福を善き体制の中で維持することを教える。官房学は君主の王領地収入、レガリエン収入、臣民の義務的支払いによる収入の適切な使用を教えるのである。1729年の時点でデイトマールの官房学は、その具体的な骨子が示されるのである。これは後述(3)『入門』④に受け継がれていく（図2参照）。

(2) 『経済学、ポリツァイ学、官房学の構想（*Project*）。そこではラント経済、都市経済ならびに商業・ポリツァイ・官房制度の総合的な洞察、そしてその受容への提言、また勉強する若者のための、そして大学講義のより詳細な説明のための経済文献目録、が自然法・歴史学・政治学公式正教授ユスト・クリストフ・デイトマールによって作成される』（以下『構想』と略す）、1730年頃。

デイトマールは『経済学評論』の刊行の傍ら、1730年頃に『構想』を発表する⁽¹⁰⁾。その序言（Vorrede）でデイトマールは次のように述べている。「国家の福祉がとりわけ、ラント内の経済制度、ポリツァイ制度、そして官房制度の善き仕組みに基づいているのと同じように、それらを通じて生業、富、権力が達成されるように、それらの学問は最も有用な科目の一つであり、従って、国家に精通している人たちや他の有名な人たちが、それらが高等学院において完全に無視されてきた習わしがあると、嘆いたのは正当なことであった。今や、そのような欠陥を除去するよう、国王陛下、私たちのきわめて慈悲深き国王から、次のきわめて有益な指令が出された。すなわち、言及された学問は、他の科目と同様、陛下の大学において、学んでいる学生たちに対して実施されなければならない、と。そして当地においてそれを実行するようきわめて慈悲深くにも私に命じられた」（Dithmar, Vorrede, [S. 1]）。国王が大学で経済制度、ポリツァイ制度、官房制度に関する学問が無視されてきた状況を改めるため、その科目をデイトマールに委ねた（国家の福祉とこれら三者との関係は(3)『入門』③に受け継がれ、繰り返し議論される。図1参照）。「だが当該学問の概説書はまだ完全に不足している」（Dithmar, Vorrede, [S. 2]）ので⁽¹¹⁾、デイトマールはこの『構想』で概説書の作成を試みている。『構想』は、

第1章 経済学研究総論

第1項 「経済」によって何が理解されるのか、以下全22項

第2章 ラント経済

第1項 経済のラント経済と都市経済への分類、ならびに経済制度、以下全200項

第3章 都市経済

第1項 ドイツにおける都市の起源、以下73項

第4章 商業制度

第1項 商業の起源と発展、以下全39項

第5章 ポリツァイ制度

第1項 ポリツァイはどこに存在しているか、以下全119項

第6章 官房制度

第1項 領邦君主収入の様々な基礎, 以下全77項

という構成となっている。デイトマールは『経済学評論』で主張した内容をより詳細な形で提供する。ただし, 経済学研究の対象が, ラント経済, 都市経済, 商業制度に区分されている。これらの分量, 項目数から言って, デイトマールにとっては当初から, 経済学, ポリツァイ学, 官房学のうちで経済学が最重要科目であったことは間違いない。

- (3) 『自然法・万民法・歴史学, 経済学・政治学・官房学公式正教授, ベルリン科学協会員ユスト・クリストフ・デイトマール, 経済学, ポリツァイ学, 官房学入門 (*Einleitung*), ならびにその講義におけるより詳細な説明のための, 当該科学に役立つ文献目録一覧』(以下『入門』と略す), 1731年。

こうしてデイトマールは『経済学評論』と『構想』に続いて1731年, 『入門』を発表する。デイトマールが官房学教授に任命された後, 実に4年が経過していた。『入門』初版(書誌(折記号): $[\pi]^4 X^4 A-T^8$)は, 次のような構成となっている。

「王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会」全3ページ

「公開講演の告知」全5ページ

「序言」全6ページ

「第1部 経済学, ポリツァイ学, 官房学の区分総論」S. 1-12. (全12ページ)

「第2部 経済学」S. 12-91. (全80ページ)

「第3部 都市経済」S. 91-132. (全121ページ)

「第4部 ポリツァイ学」S. 133-224. (全42ページ)

「第5部 官房学」S. 225-288. (全64ページ)

「経済学, ポリツァイ学, 官房学文献」S. 289-297. (全9ページ)

「主要事項索引」S. 298-304. (全7ページ)

デイトマールの『入門』は全部で6版を数えている。表2は各版の表題をまとめたものである。

表2 『入門』各版の表題

版	表題
初版	Einleitung in die Oeconomische- Policey- und Cameral-Wissenschaften Nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Bücher- Vorrahts zu mehrerer Erklärung in seinen Lectionen darüber entworffen Franckfuuth an der Oder/ bey Johann Gottfried Conradi. 1731. [Register der vornehmsten Sachen. Druck-Fehler あり S. 304.] 全304ページ。
新增補版 〔第2版〕	Einleitung in die Oeconomische Policei- und Cameral-Wissenschaften, nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Bücher-Vorrahts und ausführlichen Register Neue vermehrte edition. Franckfurth an der Oder/ Verleget Johann Gottfried Conradi. 1740. 編者不明, 「親愛なる読者 へ」を追加, 初版の誤植訂正済み。全304ページ。
新增補版 〔第3版〕	Einleitung in die Oeconomische Policei- und Cameral-Wissenschaften, Nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Bücher-Vorrahts und ausführlichen Register. Neue vermehrte Edition. Franckfurth an der Oder, Verlegts Johann Joachim Friedel. 1745. 編者不明。全304ページ。
新增補版 〔第4版〕	Einleitung in die Oeconomische Policei- und Cameral-Wissenschaten, nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Bücher-Vorrahts und ausführlichen Register Neue vermehrte Edition. Franckfurth an der Oder Verlegts Johann Christian Kleyb 1748. 編者不明。全304ページ。
第5版	Einleitung in die öconomischen, Policey- und cameral-Wissenschaten. Nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Büchervorrahtes und ausführlichen Register. Mit neuen Anmerckungen zum Gebrauch öconomischer Vorlesungen vermehret und verbessert von D. Daniel Gottfried Schreber. Fünfte Ausgabe. Frankfurt an der Oder, Verlegt von Johann Christian Kleyb 1755. [Druckfehler あり S. 328] 全323ページ。
第6版	Einleitung in die öconomischen, Policey- und Cameral-Wissenschaten. Nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Büchervorrahtes und ausführlichen Register. Mit neuen Anmerckungen zum Gebrauch öconomischer Vorlesungen vermehret und verbessert von D. Daniel Gottfried Schreber. Sechste Auflage. Franckfurth an der Oder, Verlegt von Anton Gottfried Braun, 1769. 誤植訂正済み。全328ページ。

『入門』第2版は、表題が変更されるとともに、表題に「索引」が加えられている。そして第2版とその後の版には、「親愛なる読者 (Geneigter Leser)」(作者不明) が加えられている⁽¹²⁾。また第5版には、シュレーバー (Daniel Gottfried Schreber, 1708-1777)⁽¹³⁾ による「新しい序言」(Neue Vorrede), そしてその後(「王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会」の前)に「王立ヴィアドリナ大学経済学・政治学・官房学教授就任式のプログラム, 前置き〔告知〕」(Academiae Regiae Viadrinae Programma Inaugurationi Professoris Scientiarum Oeconomico Politico Cameralium Praemissum.) 1葉が加えられている。

この『入門』の表題に関して、少し言及しなければならない。初版では“Einleitung in die Oeconomische- Policy- und Cameral-Wissenschaften”のように、ハイフン (-, 原典では二重ハイフン, =) が用いられている。シュレーバーは表題の形容詞“Oeconomisch”を複数4格に対応させると同時にカンマ (,) を加えて, “Einleitung in die öconomischen,” へ変更している。より文法的に正しい表現に変えたと思われる⁽¹⁴⁾。これにより本書が, 経済学 (Oeconomische Wissenschaft), ポリツァイ学 (Policy-Wissenschaft), 官房学 (Cameral-Wissenschaft) の3学問への入門書であることが明快となる。

『構想』で示された通り, 経済学に最大のページ数が割かれている。『構想』と『入門』の構成を比較したものが表3である。

表3 『構想』と『入門』初版の構成の比較

『構想』における官房学概説書の構成	『入門』の構成
第1章 経済学研究総論 第1項 「経済」によって何が理解されるのか、以下全22項	王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会 公開講演の告知 序言 第1部 経済学，ポリツァイ学，官房学の 区分総論
第2章 ラント経済 第1項 経済のラント経済と都市経済への分類，ならびに経済制度，以下全200項	第1節 経済学の説明，以下全17節 第2部 経済学 第1編* ラント経済 第1章 様々なラントギュッター，その所有者，それに付属するもの 以下全13章
第3章 都市経済 第1項 ドイツにおける都市の起源，以下73項	第3部 都市経済 第1章 ドイツにおける都市の起源とその最初の状態 以下全9章
第4章 商業制度 第1項 商業の起源と発展，以下全39項	第4部 ポリツァイ学 第1章 ポリツァイ学総論 以下全21章
第5章 ポリツァイ制度 第1項 ポリツァイはどこに存在しているか，以下全119項	第5部 官房学 第1章 官房学，領邦君主収入総論，ならびにシャトゥール領，世襲領，固有領各論 以下16章
第6章 官房制度 第1項 領邦君主収入の様々な基礎，以下全77項	経済学，ポリツァイ学，官房学文献 主要事項索引

* 初版から第4版までは，第1編（Erstes Buch）と記載されている。しかしその後の本文に第2編は存在していない。そのためシュレーバーは，「第2部 経済学 第1編 ラント経済」を「第2部 ラント経済」へ編表記を変更している。

『構想』に従って『入門』が執筆されたことは明らかである。しかし，『構想』にあった商業制度が，『入門』ではなぜか削除されている。

では，目次に従って『入門』を検討していく。

①王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会 (Rector & senatus academiae regiae Viadrinae)

これは、1727年、聖三位一体主日、第17日付けで王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会が出した文書と思われる。ラテン語と一部ドイツ語で書かれている。このドイツ語部分は、前述のゲルラントの1727年8月26日文書に合致しており、

「朕は自身の動機に基づき、我が地元の大学において官房、経済そしてポリツァイ事項が、その他の科目や学問と同様に講義されるべきであると、そしてこの目的のためにまたこのことにより、ハレ大学で行われているのと同様に、特別な教授職 (Profession) を創設することをきわめて寛大にも決定した。そうすることにより、学んでいる若者たちは、ある期間、そして官職に就く前に、上記の学問において十分な基礎が獲得できるのである。そして、朕はこの教授職に、これまでの自然法・万民法・歴史学の教授であるデイトマールを、この問題の手腕によって、他の誰よりも抜擢し、この新しい教授職を彼に慈悲深くも授けることを完全に納得した。朕は恩寵により、君たちに朕の最も寛大な意向を、当地で学んでいる若者たちに、公に知らせ、彼らに対して、とりわけ朕のラントの子弟が昇進する際には、朕は、彼らが前述のデイトマールからその講義 (Collegia) を受けたという優良証明書 (ein gutes Attest)⁽¹⁵⁾を提示するのであれば、ぜひともそれを見たいと思っていることを命じるものである。そして、君たちはこの新しい教授職で彼〔デイトマール〕を保護しなければならない。」

と記されている (Gerland, S. 427-428. Dithmar, 1731, [S. 3]⁽¹⁶⁾)。教会歴の1727年、聖三位一体主日、第17日が西暦のいつになるのかは不明である。しかし、8月26日文書が引用されていることから、聖三位一体主日、第17日は8月26日以降である。国王は、ハレ大学におけるガッサーと同様に、官職に登用される人物は、デイトマールの官房学の授業を受け、その成績優良者でなければならないことを明確に表明する。官房学は官吏登用の学問としての性格が与えられることになる。これまで大学で教えられてこなかった「官房、経済、ポリツァイ事

項」が国王の意向によりフランクフルト大学で講義されること、そして担当者をデイトマールにすること、が大学当局に示されたことにより、デイトマールは講義の準備を開始した。

②公開講演の告知 (Oratione publica)

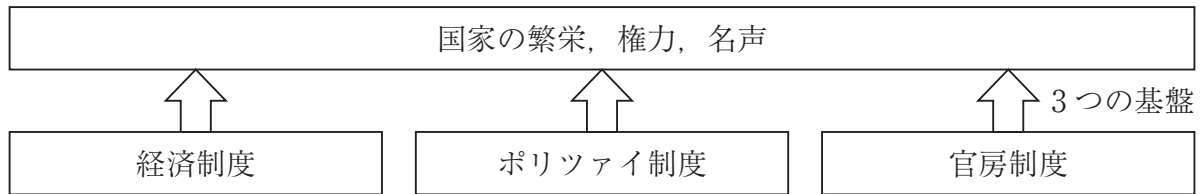
これもラテン語で書かれている。フリードリヒ・ヴィルヘルム 1 世によって経済学、政治学、官房学公式正教授 (Oeconomico- Politico- Cameralium Prof. Publ. Ord.) に任命されたデイトマールが1727年10月 3 日、教授就任の公開講演を10月10日に行うことが告知された (Dithmar, 1731, [S. 4])。彼は、国王以外にも、ゼッケンドルフ、トマジウス (Christian Thomasius. 1655-1728)、ルーデヴィヒ (Johann Peter Ludewig. 1668-1743)、モルホフ (Daniel Georg Morhof. 1639-1691)、エルンスト敬虔公 (Ernst der Fromme. 1601-1675) などが、経済学を他の科学と同様に大学で若者に教えるべきだとの考えを持っていたとする。彼は、10月10日の公開講演において、従来のアリストテレスの経済学ではなく、新しい「経済学の卓越性、正当性、そして私に与えられた職務の理由を述べることを決定した」 (Dithmar, 1731, [S. 8]) と記している⁽¹⁷⁾。

③序言 (Vorrede)

デイトマールは、冒頭で「経済学、ポリツァイ学、官房学の卓越性を広範に称賛する必要がないのと同様、国家の繁栄、権力、名声が、うまく調整された経済制度、ポリツァイ制度、官房制度に基づいていることは当然のことである」 (Dithmar, 1731, Vorrede, [S.1-2]) と書き、これら学問の重要性を説いている。デイトマールは先年、官房学の『構想』を出版した。「けれども私の講義に基づいて書かれたものは、短い文章のみで構成されており、そこではいくつかの文章で説明、詳論されなければならない。ポリツァイ学の本書第4部では、当国のポリツァイ令 (die Policei-Verordnungen) が簡潔に引用され、プロイセン王国ラント法 (das Königlich-Preußische Land-Recht) の主要部分を説明する機会をとらえ、同時に、他国のラント法 (das Land-Recht) の最も注目す

べき部分に言及するであろう」(Dithmar, 1731, Vorrede, [S.4-5])と予告している。ただし、『構想』の第4章で取り上げられていた商業制度が、なぜ『入門』では削除されたのか、ここではその理由は語られていない。「序言」は1731年11月16日付けとなっている。図1は序論におけるディトマールの国家繁栄の基盤と3制度との関係を表している。

図1 序言におけるディトマールの国家繁栄の3つの基盤



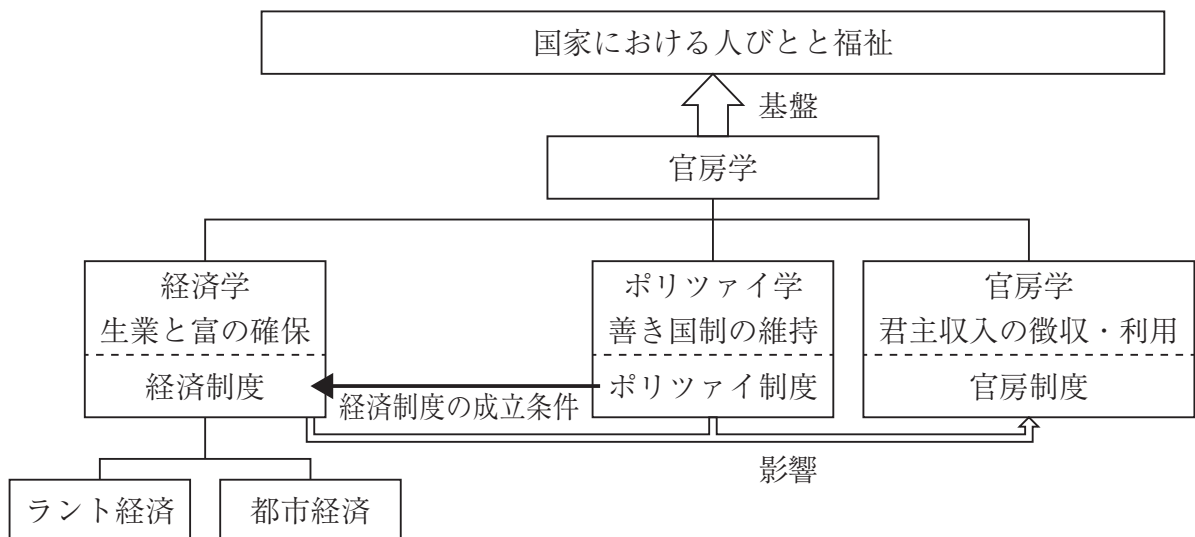
④『入門』本文

当時のカメラリストの著作（例えばゼッケンドルフの『ドイツ君主国』）は、版を多く重ねた。シュレーバーはディトマールの『入門』の新序言の冒頭において、「先立つ4つの版が絶版」（1755年）、「先立つ5つの版が絶版」（1769年）と書いている。従って『入門』には常に需要があり、シュレーバー自身も自分の講義にも利用していたので、彼は新版（第5版、第6版）の改訂を引き受けたのである。

ディトマールは『入門』第1部において官房学を3つに分けて次のように定義する。まず経済学に関して、「経済学あるいは家政学の術そして家庭経済の術は、ラントおよび都市の正当な産業（Gewerbe）を通じて、いかにして世俗的幸福を促進させる生業と富が獲得されるのか、を教えるものである」（Dithmar, 1731, S. 2. §. 1）。「ポリツァイ学は、ポリツァイ事項を扱う。しかし、それによって理解されるものに関する見解はすべて同一というわけではない。ある人は、ポリツァイ事項に人間の食事、飲料、衣服だけを理解するが、他の人は、それをさらに広げたり、それを司法制度に対置させたりする」（Dithmar, 1731, S. 5. §. 7）。「しかし、帝国および領邦君主のポリツァイ条令によれば、ポリツァイ事項には司法だけでなく、聖界制度もある程度含まれるのと同様に、

ポリツァイ学は、一般的な幸福のための一国の対内的および対外的制度がどのようにして善き国制、秩序の中で維持されるのかを教える。したがって、ラントの上級のお上は、人口が周密な状態で臣民が、神を畏れ、キリスト教徒的で、公正で名誉ある健康的な生活とふるまいを維持し、生業や豊かな世俗の財も繁栄するラントと都市の産業によって促進されるようにするだけではなく、ラントが良く配置された都市、地区、村落とともに開拓され、すべてが良好な国制の中で維持されるよう、配慮しなければならない」（Dithmar, 1731, S. 5-6. §. 8）。そして「官房学は、君主の王領地とレガリエンがいかにして利用されるか、そこからまた、いかにして臣民の義務的な支払いや他の公的基金から君主の収入が徴収され、改善され、共同体の維持のために利用されうるかを教える」（Dithmar, 1731, S. 6-7. §. 10）。3者の関係について、「この3つの学問は密接に結びついており、経済制度は適切なポリツァイがなければ成立しないし、官房制度は両者の大部分からその影響が待ち受けることになる」（Dithmar, 1731, S. 7. §. 11）。最後に「上述の説明から、これらの学問の必要性と卓越性が明らかとなる。これらの学問は、国家における人びとと福祉を維持する基盤なのである」（Dithmar, 1731, S. 7. §. 12）。図2はデイトマールの国家における人びとと福祉と官房学の関係を表している。

図2 デイトマールの官房学



⑤経済学，ポリツァイ学，官房学文献（Bücher-Vorrat）と主要事項索引（Register）
デイトマールは本文が終了した後で官房学の文献目録⁽¹⁸⁾と索引をつけている。

(4) 『ユスト・クリストフ・デイトマールの，講義におけるより詳細な説明のためのプロイセン王国およびブランデンブルク選帝侯国の国家学草案（*Entwurf*）』（以下『国家学草案』と略す），1734年。

デイトマールは、『国家学草案』を1734年に公刊した。その読者への序文で「国家を認識するための，そして一般的にプロイセン王国のラントを認識するための，大学で用いるのに適した入門書が不足しているので，私は数年前にブランデンブルク選帝侯国の歴史に関する草案⁽¹⁹⁾を私の講義の基盤として出版した。しかし，現在の『国家学草案』ではそれを拡張し，プロイセン王国のラントの起源と発展だけでなく，そのラントの住民，聖職者，市民制度，国家制度についても簡潔に描いた」（Dithmar, *Entwurf*, S. 1-2）と述べ，官房学に続いて国家学に対象を広げている。『国家学草案』は，「国家学への完全な入門書」への準備であった。彼が晩年，大学で国家学の講義を担当していたのかは不明である。しかし残念ながら国家学入門は執筆されることなく，デイトマールは亡くなるのである。

4 おわりに

今回，明らかになったのは次の点である。まず，デイトマールの経歴についてである。これまでデイトマールの詳しい伝記は知られていなかった。しかしゲルラントの記述やデイトマールが関与した出版物から，デイトマールがフランクフルト大学学長，哲学学部長，図書館館長の要職に就いていたことが確認できた。ただしその在任期間は不明である。

次にデイトマールの官房学についてである。ガッサーの教科書は『経済学，政治学，官房学入門』の表題がつけられているとはいえ，目次や本文において政治学，官房学を個別に分類することはせず，説明も経済学が中心であった。

しかしディトマールの教科書『入門』は、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の要望通り、経済学、ポリツァイ学、官房学を個別にまんべんなく説明をすることに主眼を置いたものになっていた。それでも経済学に関する部分が大きな分量を占めていたのはガッサーと同じである。この明確な官房学の3区分が先例になって、ユスティは、『国家経済学』（初版1755年）、『ポリツァイ学の基本原理』（初版1756年）、『財政の体系』（1766年）を独立した形で出版した。一方ゾネンフェルスは、順番を入れ替えるものの『ポリツァイ、商業および財政の基本原理』（第1巻初版1765年、第2巻初版1769年、第3巻初版1776年）3巻本を著した。ディトマールによって3区分された官房学は、その後のカメラリストたちとその官房学の方角性を決定づけたのである。この意味でディトマールの功績は非常に大きい。

さらにディトマールは国家学に関する著作『国家学草案』を公刊する。もし彼が存命であったなら、フランクフルト大学で国家学を講義していたのかもしれない。

注

- (1) 『入門』は後述するように、全8部ではなく、全5部構成である。
- (2) ガッサーは国王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の1727年7月24日付命令（Rescript）を記述している（Gasser, Einleitung, S. 7）。ガッサーの『官房学入門』1729年は、2種類が存在している（VD18 Number:VD18 90686497と、VD18 10331689）。両者の新版、改訂版は確認されていない。10331689は1970年に復刻されている。
- (3) 後述するように、ディトマールはガッサーと同様、『入門』（1729）を公刊する前に『構想』（1728）をまとめている。
- (4) ディトマールが1721年2月12日に外国会員に選出されたことは、「ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー」（Die Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften）ホームページでも確認することができる。
<https://www.bbaw.de/die-akademie/akademie-historische-aspekte/mitglieder-historisch/historisches-mitglied-justus-christoph-dithmar-587>（閲覧日：2024年9月13日）
- (5) グリムは「コメンデ・ゾネンブルクの聖ヨハネ騎士団評議員（Rat des Johanniterordens für die nahegelegene Kommende Sonnenburg）」と記している（Grimm, S.746）

- (6) ゲルラントは、文書の冒頭に「プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム、代理 (Friedrich Wilhelm König in Preussen pp [per procurationem 代理の意か] .)」をつけている (Gerland, S.427)。ゲルラントの文書と「王立ヴィアドリナ大学の学長と評議会」のドイツ語部分はいくつか異なる記述がある。
- (7) 注 (4) を参照せよ。
- (8) ハウゼンは出典を明示していないものの、「デイトマールは大学に対する不満から命を落とした」と述べている (Hausen, S. 21)。デイトマール家に関しては、ウルリヒ・デイトマールの『デイトマール家』(私家版)がある。
- (9) 『経済学評論』に関しては、Koschwitz や Kohfeldt を参照せよ。
- (10) ゴールドスミス・クレスライブラリーは、その根拠を示すことなく、デイトマールの『構想』の刊行年を1730年頃としている。
- (11) デイトマールは、『入門』初版1731年で、ガッサーの『公式教育計画』1728年 (Dithmar, S.4. Anm. k) を、ガッサーの名前 (書名なし) を巻末の「文献目録」に挙げている (Dithmar, S.290)。デイトマールが「だが当該学問の概説書はまだ完全に不足している」と言う時、ガッサーの『官房学入門』1729年を彼がどのように評価していたかは非常に興味ある。
- (12) 「親愛なる読者」には、「皆さんは今、故デイトマール教授の経済学の新版を受け取っています。偉大なる神がこの学識ある人物をもうしばらく生かしていらっしゃれば、この版は、もっと増訂された姿となっていたでしょう。というのも彼は多くの収集物を遺していたからです。しかしながら、それらは失われたのではなく、バルタザール・ハインリヒ・フォン・ハインス、リヒテンベルク領主閣下 (Balthasar Heinrich von Heins, Erbherr auf Lichtenberg) がそれらを管理されたのは良いことです。閣下は私にも、デイトマール教授が増訂した本のことをきわめてご親切にも連絡してくださいました。そこにはとりわけ多くの著述家が引用されています。ハインス閣下はご自身の精選家庭図書館に他の収集物も所蔵されており、きわめてご親切にも〔私に〕他の収集物を提供してくださいました。(若干の学者がよくやるように) それを独り占めするのではなく、社会に公表することは、次の版がもっと増訂された姿になることでしょう。親愛なる読者にその情報をお伝えしたいと思います」と書かれている。これによれば、デイトマールが自身で増訂版を用意していたが、未公刊に終わったこと、さらにデイトマールの遺品は、ハインスが収蔵したことが分かる。第2版およびその後の版にデイトマールが用意した増訂版が利用されたのか、そしてハインスの詳細については不明である。
- (13) シュレーバーはビュツォウ (Bützow) とライプツィヒ (Leipzig) で官房学を担当した。
- (14) 『入門』表題に関してブリュックナーは次のように述べている。「デイトマールは “Einleitung in die Oeconomische Policei- und Cameral-Wissenschaften” と述べている。もし形容詞 “Oeconomish” が実際に名詞 “Wissenschaften” にかかっている、“Policei” だけにかかっているのではないならば、…“Oeconomishe” ではなく

“Oeconomishen”と書かなければならない」(Brückner, S. 72. Anm. 39)。ブリュックナーが使用しているのは第4版である。第2版から第4版まで“Oeconomishe”の後のハイフンが付けられていない。ハイフンがないために、ブリュックナーのいう「経済的ポリツァイ学」、さらには「経済的官房学」というように、両者を修飾する可能性も生じてしまうのである。

- (15) 「優良証明書」は初版、第2、第5、第6版では「ein gutes Attest」、第3、第4版では「ein gutes Attestat」とされている。
- (16) ディトマールの『入門』の折記号〔 π 〕4とX4にはページ番号がつけられていない。〔 〕で示したページ番号は筆者が便宜的に示している。折丁は〔 π 〕3である。
- (17) ガッサーが教授就任の公開講演を行ったかは不明である。
- (18) ディトマールの『入門』第3版では文献目録に掲載されている文献が増えている。文献目録に関して、初版では“Bücher-Vorrat Zu denen Oeconomischen- Policy- Und Cameral-Wissenschaften”と形容詞“Oeconomischen”にハイフンが付けられている。第2版から第6版までは“Bücher-Vorrat Zu denen Oeconomischen Policy- Und Cameral-Wissenschaften”と、ハイフンが削除されている。ディトマールは経済学、ポリツァイ学、官房学を明確に区分している。
- (19) ディトマールが言及しているブランデンブルク選帝侯国の歴史に関する草案の詳細は不明である。ベルリン国立図書館で「Justus Christoph Dithmar Entwurff」で検索すると、『国家学草案』1734年、1750年、『歴史的草案』1735年、『宗教改革史草案』1717年、『ブランデンブルク史草案』1720年（戦災喪失）、を含む8点が表示される。ディトマールが『国家学草案』で言及しているのは『ブランデンブルク史草案』と思われる。

<https://stabikat.de/Search/Results?type=AllFields&limit=20&lng=de&lookfor=justus+christoph+dithmar+entwurf&commit=Suchen>（閲覧日：2024年9月13日）

参考文献

ディトマール官房学関連文献

①『経済学評論』

Dithmar, Justus Christoph. *Die Oeconomische Fama von allerhand zu den Oeconomischen- Policy- und Cameral-Wissenschaften gehörigen Büchern/ außerlesenen Materien/ nützlichen Erfindungen/ Projecten/ Bedencken/ und andern dergleichen Sachen*. Franckfurt an der Oder, bey Johann Gottfried Conradi. 1729-1733. 筆者が所有しているのは第2版、1743年。

②『構想』

Dithmar, Justus Christoph. *Project der Oeconomischen- Policy- und Cameral-Wissenschaft, worinnen eine generale Erkenntniß der Land- und Stadt Oeconomie so wohl als des Commerzien- Policy- und Cameral-Wesens/ samt Vorschlägen zu*

derselben Aufnahme und Oeconomischen Bücher Vorrath/ zu Nutz der studirenden Jugend/ und mehrerer Erklärung in seinen Academischen Lectionen entworffen von Just. Christoph. Dithmar, Jur. Nat. Hift. & Polit. P. P. O. Franckfurt an der Oder/ gedruckt bey Joh. Christoph Schwartz/ U. B. [1730] . Goldsmiths'-Kress no. 06734.

③『入門』

Dithmar, Justus Christoph. *Justus Christoph Dithmar, Jur. N. & G. Hist. & Oeconomico- Polit. Cameralium Prof. Publ. Ord. Societ: Scient. Berol. Sodal. Einleitung in die Oeconomische- Policy- und Cameral-Wissenschaften nebst Verzeichniß eines zu solchen Wissenschaften dienlichen Bücher-Vorrahts zu mehrerer Erklärung in seinen Lectionen darüber entworffen.* Franckfurth an der Oder, bey Johann Gottfried Conradi, 1731.

Goldsmiths'-Kress library of economic literature ; no. 6899.3.

筆者が所有しているのは、原典1745年版、1747年版、1755年版、1769年版そして1745年版復刻版の5点である。

④『国家学草案』

Dithmar, Justus Christoph. *Just. Christoph. Dithmars Entwurff der Königlich-Preußischen und Chur- Brandenburgischen Staats-Wissenschaft, zu mehrerer Erklärung in seinen Lectionen darüber.* Franckfurt an der Oder, bey Johann Gottfried Conradi. 1734.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10015081?page=1>

(閲覧日：2024年9月13日)

デイトマール文献，刊行順

Dithmar, Justus Christoph. *Vita Gregorii Romani Pontificis ejus nominis Septimi concinnata a Justo Christoph. Dithmaro, in Academ. Viadrina Hist. Prof. Extraord. Francofurti ad Viadrum, Impensis Jeremiae Schrey & Johannis Christoph. Hartmanni, 1710*

<https://opendata.uni-halle.de/handle/1981185920/37003>

(閲覧日：2024年9月13日)

Dithmar, Justus Christoph. *Dissertatio Historica de Electorum S.R.I. Origine, Quam ... Dn. Frid. Wilhelmo, ... Praeside ... Justo Christophoro Dithmaro, in Regia Viadrina Prof. Ordin. ... defendet Augustus Gebhardus de Marwitz, ... Francofurti ad Viadrum, Literis Johannis Christophori Schwartzii. 1711.*

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10956830?page=,1>

(閲覧日：2024年9月13日)

Dithmar, Justus Christoph. *Disputatio Historico- Politica de statu politico antediluviano, Quam Deo propitio, praeside ... Justo Christophoro Dithmaro, Hist. & Polit. in Acad. Viadrina Prof. Ord. ... ventilandam proponet Ludophus Ludov.*

Pötterus, ... Francofurti ad Viadrum, Literis Joh. Christophori Schwartzii. 1713.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10640712?page=,1>

（閲覧日：2024年9月13日）

Dithmar, Justus Christoph. *Wernheri Teschenmacheri ab elverfeldt annales cliviae, juliae, montium, marcae Westphalicae, Ravensbergae, Geldriae et Zutphaniae, duabus partibus comprehensi quos denuo edi curavit, adjectisque Annotationibus, Tabulis Genealogicis, Geographicis, Codice Diplomatico atque Indice locupletissimo illustravit Justus Christophorus Dithmarus, Historiar. in Academia Viadrina Prof. Ordin. ejusdem Academiae Bibliothecarius, & Societ. Scient. Berol. Sodal. Francofurti & Lipsiae, apud Christophorum Gottlieb Nicolai. 1721*

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb11348255?page=6,7>

（閲覧日：2024年9月13日）

Dithmar, Justus Christoph. “Rector Universitatis Regiae Francofurtanae Iustus Christophorus Dithmarus, Historiarum ac Politices Professor Publicus Ordinarius & h. t. Facult. Philosoph. Decanus.” [Einblattdruck] . 1722.

VD18 Number: VD18 1167458X

<https://vd18.gbv.de/viewer/fullscreen/021182280/1/>

（閲覧日：2024年9月13日）

Dithmar, Justus Christoph. *Dissertatio de abdicatione regnorum aliarumque dignitatum illustrium tam secularium quam ecclesiasticarum, quam Deo Propitio, praeside ... Justo Christophoro Dithmaro, Hist. et Polit. P. P. O. ventilandam proponit Johannes Lothsack, ... Francofurti ad Viadrum, Typis Tobiae Sschwartzii. 1724.*

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10154242?page=,1>

（閲覧日：2024年9月13日）

Dithmar, Justus Christoph. *Geschichte des Ritterlichen Johanniter-Orden und dessen Herren-Meisterthums in der Marck, ... worinn des am VII. April dieses Jahrs gehaltenen Ritter-Schlags solennitaeten Verzeichniß der investirten Ritter und derselben Stamm-Wappen wie auch Ursprung des Ritterschlags und Ritterlichen Orden Anmerckungen von Ordens-Creutz Herrn Abt de Vertot ins Teutsche übersestze Dissertation vom alten und neuen Gouvernement des Johanniter-Ordens enthalten und beschrieben von Justus Christoph Dithmar J. Nat. & Gent. Hist. Polit. & Oecon. P. P. der Berlinischen Societät der Wissenschaften Mitglied. Franckfurth an der Oder Bey Johann Gottfried Conradi. 1728.*

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10899573?page=,1>

（閲覧日：2024年9月13日）

Dithmar, Justus Christoph. *Dissertatio Historica et Iuris Publici de Quatuorviratu Imp. Rom. Germanici, quam praeside Just. Christoph. Dithmaro Jur. Nat. et Gent*

et Hist. Prof. Publ. Ord. ... defendet Ernst. Sigism [und] . Witte. ... Francofurti ad Viadrum, Typis Sigismundi Gabriel. Alex. [1735] .

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb11050948?page=,1>

(閲覧日：2024年9月13日)

Dithmar, Justus Christoph. *Just. Christoph. Dithmars Entwurff der Königlich-Preußischen und Chur- Brandenburgischen Staats-Wissenschaft, zu mehrerer Erklärung in seinen Lectionen darüber.* Franckfurt an der Oder, bey Johann Gottfried Conradi. 1734.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10015081?page=1>

(閲覧日：2024年9月13日)

Dithmar, Justus Christoph. *Justi Christoph. Dithmari Juris Nat. et Gent. et Histor. in Acad. Viadr. Prof. Societatis Scient. Berol. Sodalit Dissertationum Academicarum Atque Exercitationum Varii Ex Jure Publico, Naturali, Et Historia Desumpti Argumenti Sylloge cum Indice Auctorum et Rerum.* Lipsiae. Impensis Jo. Christiani Langenhemii. 1737.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10825142?page=,1>

(閲覧日：2024年9月13日)

その他の文献

Brückner, Jutta. *Staatwissenschaften, Kameralismus und Naturrecht. Ein Beitrag zur Geschichte der Politischen Wissenschaft im Deutschland des späten 17. und frühen 18. Jahrhunderts.* München. Verlag C. H. Beck.1977.

Dithmar, Uli [Ulrich] ., *Die Familie Dithmar.* Privatdruck. Kassel. 2020.

Gasser, Simon Peter. *Simon Peter Gassers, Jcti Einleitung zu den Oeconomischen Politischen und Cameral-Wissenschaften, worinnen für dieses mal die OECONOMICO- CAMERALIA von den Domainen- oder Cammer- auch andern Gütern, deren Administration und Anschlägen, so wol des Ackerbaues als anderer Pertinentien halber, samt den Regalien angezeigt und erläutert werden, nebst einem Vorbericht von der Foundation der neuen oeconomischen Profession, und des Allerdurchlauchtigsten Stifters eigentlichen allergnädigsten Absicht.* Halle. In Verlegung des Wäysenhauses, 1729. Neudruck. Glashütten im Taunus. Verlag Detlev Auvermann KG. 1970.

VD18 Number:VD18 90686497

<https://vd18.gbv.de/viewer/fullscreen/026306506/1-1/>

(閲覧日：2024年9月13日)

刊行年は同じだが版違いをミュンヘンデジタル化センター (Münchener Digitalisierungszentrum. MDZ) が公開している。注(2)参照。

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb11757194?page=,1>

(閲覧日：2024年9月13日)

Gasser, Simon Peter. *Programma Publicum oder nöthiger Vorbericht von der von Ihro Königl. Maj. in Preussen auf der Universität Halle allergnädigst neu fundirten Profession über die Oeconomischen- Cameral- und Policy-Wissenschaften wobey die zum besten/ und sonderlichem Eyfer vor die Wohlfahrt der studirenden Jugend abzielende allergnädigste Königliche Absicht mit mehrem erläutert/ zugleich auch seine künfftige Lehr-Art über die am Ende befindliche und allergnädigst approbirte 36 Capitul vorstellet der hierzu allergnädigst berufene Professor Simon Peter Gasser*. Halle, zu finden im Wäysenhouse, 1728.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10155148?page=,1>

（閲覧日：2024年9月13日）

Gerland, Otto. “Justus Christof Dithmar, ein Beitrag zur Geschichte der Neuordnung der Landesverwaltung unter König Friedric Wilhelm I. und zur Geschichte der Universität Frankfurt a. O.” in : *Zeitschrift für Litteratur und Geschichte der Staatswissenschaften*. 2. Band. Leipzig. Verlag von C. L. Hirschfeld. 1894. S.416-435.

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015056081006&seq=463>

（閲覧日：2024年9月13日）

Grimm, Heinrich. “Dithmar, Justus” in: *Neue Deutsche Biographie* 3 (1957), S. 746-747.

<https://www.deutsche-biographie.de/pnd128453230.html#ndbcontent>

（閲覧日：2024年9月13日）

Hausen, Carl Renatus. *Geschichte der Universität und Stadt Frankfurt an der Oder, seit ihrer Stiftung und Erbauung, bis zum Schluß des achtzehnten Jahrhunderts, größtentheils nach Urkunden und Archiv-Nachrichten bearbeitet*. Frankfurt an der Oder. Gedruckt bei Friedrich Apitz, im Verlag bei dem Verfasser und in Commission in Leipzig bei Gräff und in Berlin bei Belitz und Braun. 1800.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10733002?page=1>

（閲覧日：2024年9月13日）

Inama von Sternegg, Theodor. “Dithmar, Justus” in: *Allgemeine Deutsche Biographie* 5 (1877), S. 259-260.

<https://www.deutsche-biographie.de/pnd128453230.html#adbcontent>

（閲覧日：2024年9月13日）

Inama von Sternegg, Theodor, “Gasser, Simon Peter” in: *Allgemeine Deutsche Biographie* 8 (1878), S. 401-402.

<https://www.deutsche-biographie.de/pnd116449454.html#adbcontent>

（閲覧日：2024年9月13日）

Kohfeld, Christian. “Justus Christoph Dithmar : Die Oeconomische Fama. Der erste Versuch eine ökonomische Zeitschrift zu etablieren.” in : Marcus Popplow (Hrsg.) *Landschaften agrarisch-ökonomischen Wissens. Strategien innovativer Ressourcennutzung in Zeitschriften und Sozietäten des 18. Jahrhunderts*.

Waxmann, 2010, S.49-60.

Koschwitz, Hansjürgen. *Die periodische Wirtschaftspublizistik im Zeitalter des Kameralismus. Ein Beitrag zur Entwicklung der Wirtschaftsfachzeitschrift im 18. Jahrhundert*. Diss. Göttingen. 1968.

Stieda, Wilhelm. *Die Nationalökonomie als Universtätswissenschaft*. Leipzig. Bei B. G. Teubner. 1906. Unveränderter Neudruck. Vaduz/Liechtenstein. Topos Verlag AG. 1978.

Summary

Justus Christoph Dithmar's cameralism (Kameralwissenschaft)

KAWAMATA Hiroshi

Dithmar (1678-1737) published four works on cameralism: *Die Oeconomische Fama* (an economic journal, 1729-1733), *Project* (circa 1730), *Einleitung* (1731), and *Entwurff* (1734). On August 26, 1727, Friedrich Wilhelm I. appointed him as the professor of cameralism at the University of Frankfurt an der Oder. Dithmar divided cameralism into economic science, Policy science, and cameral science. He asserted that the welfare, power, and reputation of a state depend on a well-organized economic, Policy, and cameral system. He is considered one of the greatest cameralists.